

Interview



下村区長
山浦 義光さん(66=下村)

思いが伝わる商品
若者にこそ
届いてほしい

私は、下村婦人会の商品をお盆にお中元として送ったり、兄弟が帰省するときにお土産として持たせたりしています。

婦人会は就業の場であり、農産物を出荷できる場所でもあるため、地域にとってありがたい存在。まさに「よりどころ」です。近年叫ばれている六次産業化を女性たちが先駆けてやってきました。これだけ長い間、続いていることは地区の誇りでもあります。

地区の役員は毎年市房漬感謝祭に協力しています。感謝祭では駐車場係から振舞いまで、地区の人も集まる交流の場。打ち上げはえらい(ものすごい)盛り上がりです。夜遅くまでにぎわいます。地区のことや婦人会のことなど本音で語る場にもなっています。こういう時に商品やまちづくりの良いアイデアが生まれるのかもしれない。

今は簡単な食事が多くなっていますが、若者にこそ、この手作りで安全な食品が届いてほしいです。婦人会の商品は生産者や加工している人の思いが伝わる商品だと思います。

ん、みんないい人。やっぱりふるさとと温かい。湯前で仕事ができることが幸せです」と笑顔で話します。

月2〜4回は物産館や大型ショッピングセンターで出張販売。湯前は交通アクセスなど不便なこともたくさんあります。しかし、販売する会員の顔はいつも笑顔。その理由を池田さんは「湯前でやっていることが誇りだからです。販売先では、お客様に『湯前はいいところですよ』と自信をもって私たちの町を紹介しています」と話します。そこには、田舎だからという劣等感はありませんでした。



商品と一緒にほんの少しの気配りを箱に込める池田さん。食べる人にはその「心」も届いている

袋から開けてそのまま食べられる欧風ピクルス。包丁やまな板を使わなくて済む工夫は時代に合わせた工夫の一つ



「どうせ田舎」ではなく「田舎だからこそ」。人の温かさを感じつつ湯前に誇りを持って仕事を続ける婦人会員たち(左:児谷典子さん、右:生産者の椎葉茂さん)

「食べてみて、よかったら買ってください」という気持ちです」と、町に誇りを持ち、商品に自信を持っているからこそ、対面販売では絶対に押しつけません。池田さんは「商品を買ってくれた人が、いつか下村婦人会に来てくれて、一緒にお茶を飲めたらいいですね。売り場を町の人のいいの場にしたいとも思っています」と自身の夢を語ります。

「心」が届く商品を

「柚子マーマレードを北海道に送ったときにパンフレットを付けたら、ほかの商品も注文が来ました。おまけで梅干しをつけたときは、梅干しの注文がたくさん来ました」と注文販売では気配りがきつかけとなり、各地に商品が広がっています。

池田さんは「半世紀以上前の理念が今も通用します。しっかり守り続け、おいしいことはもちろん、安心安全なものを作り続けたいです。食べてくれた人だけでなく、周りにいる大切な人にも食べてほしいと思うもらえるような商品を作り続けたいです」と常に挑戦する気持ちを持っています。

声を拾い時代に合わせる

現在、洋食化で食の嗜好が変わり、減塩も叫ばれるなど漬物離れが深刻になっています。代表の池田タメ子さんは「常に時代に合わせた商品を提供しなければなりません。一方で慣れ親しんだ味を変えてほしくないという声もあります。二つを合わせるために、食べてくれる人の声を拾い、会員みんなで話し合っています」と商品作りへの思いを語ります。



下村婦人会 3代目代表
池田 タメ子さん(76=下村)

Profile
夫の定年退職をきっかけに地元湯前に帰郷。山北幸さんから誘いを受けて平成10年に下村婦人会へ。平成27年に第3代目となる代表に就任した。

地主の家で大勢の男衆、女衆がいる大家族に生まれ、た山北さんは幼少時代に祖父から「あるものを生かす」という知恵と心を学びました。そのDNAを受け継ぎ、地元で挑戦し続ける下村婦人会。代表の池田タメ子さんに話を聞きました。

ここでやることが自慢
ふるさと

故郷のプライド



新しく建てられた看板は下村区の金山充さんが婦人会のために描き上げたもの

「商品がだれに食べてもらいたいか考える」。その思いを形にしたのが市房漬の切れ端を刻み、シソの実などを加えた「きりしぐれ」。歯に抵抗があるものが食べにくい高齢者や子どもも食べやすい商品として発売当初から人気を博しています。

「今は包丁で切ることや、中身を袋から出すこともおつくうな時代。ひと手間かけてあげるだけで売れ方が全然違います」と池田さん。丸々一本包装していた欧風ピクルスのキュウリを食べやすいようダイス状にカット。包丁やまな板を使わなくてもすぐに食べられるようにしています。食べる人に寄り添い、思いやる心も山北さんから受け継がれています。

ここにある幸せと誇り

池田さんは20年前、夫の定年退職に併せて地元湯前に帰郷。山北さんの誘いを受けて婦人会にやってきました。「湯前は人情味があふれ、落ち着き、帰りたいと思える町。野菜を持ってきてくれる人、感謝祭を手伝ってくれる近所さ

変わらない「思いやり」